

もしターニヤの趣味が
料理だったら

オッドアイズプリンセスコロン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼女戦記のターニャが203航空魔導大隊の隊員に料理を食べさせるだけの話です。

目次

もしターニャの趣味がおかし作りだった	ら
	—
	1

もしターニヤの趣味がおかし作りだったら

「報告結果は・・・であります。デグレチャフ少佐では失礼します。」

そういうとセレブリヤコーフ少尉は隊長であるターニヤに報告を終えた。

「・・・では失礼します」

セレブリヤコーフは敬礼をし場を立ち去ろうとしたが、

「ちよつとまってくれないか・・・セレブリヤコーフ少尉」

ターニヤはちよつと真剣な顔で呼び止めた。

「・・・はっ!!・・・何かまだご用件でありますか?」

セレブリヤコーフは私何かやってしまったのだらうかと不安になったが、

「実はな・・・しゅ・・・で・・・試作品のテストをしてほしいのだが、

今から時間はあるか?」

セレブリヤコーフは少し聞き取れなかったが

ターニヤに頼ってもらえてうれしかったので即答した。

「大丈夫であります。・・・なんなりと命令してください!!」

「そうか・・・貴官の協力に感謝する・・・ついてきてくれ」

ターニヤは真剣な顔をしているつもりだったが、

セレブリヤコーフには若干うれしそうなそんな表情をしているように思えた。

「……しばらくしてターニヤの部屋に付いたが異様な門を見つけた

「あれは何でありますか?……魔法で作られているように思えますが?」

セレブリヤコーフはびっくりしながらもターニヤを見ていた。

「ああ……あれか、私の別荘につなげてあるドアだ。

いろいろ制約があるので、戦争には使えないがな」

ターニヤは少し残念そうに言う。「ほれ……止まってないで行くぞ」と、

セレブリヤコーフをドアに押し込んでいわゆるワープを行った。

「……わー……ああ……」

セレブリヤコーフは頭の中が混乱しながらも移動を終えた。

「大丈夫か?、セレブリヤコーフ少尉」

ターニヤはセレブリヤコーフを介抱していた。

「ふにや……」

それに気づき、びっくりして起き上がった。

「申訳ありません……すぐ起き上がります!?!」

「私は大丈夫だが、まあいい。これを見てくれ」

ターニヤはセレブリヤコーフに何かの設計図みたいなものを見せた

「これは……何でありますか？……パル？……フェ……アイス？」

セレブリヤコーフは理解に時間がかかっているようだったが、

「……でもこれかわいいですね。白と黒のクマ？でしょうか？」

そう答えるとターニヤが飛び切りの笑顔を見せてくれて

「おお……わかってくれるか。そこを作るのには苦労したんだ」

ターニヤはうれしそうにつづけた

「これはパルフェではなく、パフェというものだ。

少尉にテストしてもらいたいのはこのこれ！」

何やらここに来てから冷えるとセレブリヤコーフはその原因を見つめた。

「……か……かわいい!!……これどうするものなんですか？」

セレブリヤコーフはパフェの実物を見てすごく興奮し乙女を見せたのである。

「実はな、これは私が趣味で作ったお菓子なんだ、戦争中不謹慎であるが、

この趣味だけはどうしてもやめられなくてな、作るだけ作っているのだが、

自分ひとりでは食べきれなくて破棄するのももったいない、

それに完成度を上げたいとも思っていたので、少尉に食べてもらおうというわけだ」

ターニヤはうれしそうに話してくれた。

「わかりました。私で良ければ付き合えるだけ付き合いますよ。

・・・それにしてもデグレチャフ少佐にこんな趣味があったなんて知りませんでした」
そういうとセレブリヤコーフは嬉しそうにパフェをパクパク食べ始めた。

「うーん、おいしーい。これ帝国でカフェとかに出したら女の子を中心に売れそうですね」

「そうだろ、うまいか。だがカフェに出すにしても今は戦争中なので無理だな。

出せても士気向上や、達成報酬として渡すぐらいだな」

ターニヤは喜んではいたがいつもの真剣さも含む表情をしていた。

「・・・さて休憩も終わったことだしさして戻るか」

「デグレチャフ少佐、今日はありがとうございました。」

とても美味でしたよ」

ふたりはにこやかにしながらも戦場に戻っていったのである。

e n d